

# CZECHOSLOVAKIA

# MUSIC FESTIVAL

on The CELEBRATION of THE 100TH of THE ESTABLISHMENT of CZECHOSLOVAKIA

2018.10.28 12:30~19:30

チェコスロヴァキア建国 100 周年記念演奏会



Vranický 1756-1808



Hummel 1778-1837



Dvořák 1841-1904



Fibich 1850-1900



Kalivoda 1801-1866



Smetana 1824-1884



Novák 1870-1949



Suk 1874-1935



Janáček 1854-1928



Karel 1880-1945



Martinu 1890-1959

会場：宮地楽器  
ホール  
小ホール  
入場料：無料

主催： **ANA** NPO 日本アマチュア演奏家協会 協力：合唱団 "わだち"  
後援：チェコ大使館、チェコセンター、日本チェコ友好協会、小金井市

# Greetings

美しい音楽に耳を傾けてください。

Dear friends of music,

This year we celebrate the 100th anniversary of the establishment of Czechoslovakia. On October 28, 1918, Czechoslovakia had been declared as an independent state of Czechs and Slovaks. To commemorate this momentous day of our modern history, numerous events are organized in the course of this year.

Today, we have a great opportunity to take a listen to the famous Czech composers. The compositions of Bedřich Smetana, Antonín Dvořák and Leoš Janáček and others rightfully belong to gems of the Czech classical music. They reflect richness of the Czech history and beauty of the Czech countryside.

I am very delighted to introduce these masterpieces of the Czech classical music in Japan. Enjoy this special event! I hope you will be fully absorbed by this beautiful music.



Tomáš Dub

Ambassador, Embassy of the Czech Republic  
トマーシュ・ドゥブ チェコ共和国駐日特命全権大使

チェコの音楽に親しんでいただき、ありがとうございます。



本年10月28日に、日本でチェコスロヴァキア音楽祭が開催されるというニュースを聞いて大変嬉しく思っています。この音楽祭はチェコスロヴァキアの独立100年を祝うものです。チェコの音楽に深く精通している吉田和道氏が、この音楽祭を企画されたことに大いに敬意を表します。現在はチェコとスロヴァキアの2つの国になっていますが、この音楽祭は、これらの国の偉大な作曲家の曲を多く集めた大変興味深いプログラムになっています。

私どもコチアン・カルテットは来日公演をするたびに、チェコの音楽を演奏しました。ドヴォルザークの「アメリカ」は大変人気のあるプログラムナンバーでしたが、そのほかスーク、スメタナ、ヤナーチェク、マルティヌーなどの作曲家の曲も多く演奏しました。なぜでしょうか。それはこれらの音楽が大変ロマンティックで、特に日本人の皆さんのフィーリングに合うものだからなのではないでしょうか。いつもこれらの曲を演奏する

と日本人の皆さんは大変喜んでくださいます。チェコの音楽が日本で近年さらに人気が高まってきているということは、私にとって大きな喜びです。

チェコとスロヴァキアの音楽を紹介して下さることに大変感謝し、この音楽祭が大成功をおさめることを心より願っております。

Pavel Hůla (Kocian Quartet 1st.Vn)

パヴェル・フーラ 元コチアン・カルテット 第1ヴァイオリン奏者  
ブラハにて、2018年9月20日

日本とチェコの架け橋になりますね。

本日はチェコスロヴァキア建国100周年を日本で皆様とお祝いすることができて、大変うれしく思います。チェコの素晴らしい作曲家と作品をこのように一度に演奏する機会を企画していただいた皆様は、日本とチェコの架け橋です。心から御礼申し上げます。

両親が音楽家だったため、年少の頃から音楽に囲まれて育つ。4歳からピアノ演奏を始め、その後Prague Conservatoryに入学し、コントラバスの演奏を始める。才能は開花し、世界屈指のオーケストラ「チェコ・フィルハーモニー管弦楽団」に招待され、このオーケストラ始まって以来の最年少メンバーとなる。プラハ交響楽団、チェコ放送交響楽団、スーク室内管弦楽団、チェコ室内管弦楽団、ムジカ・ボヘミア、プラハ・スピリット・クインテットなど多くの著名な室内楽団や交響楽団、そして、パーンスタインやザンデルリンクなど著名な指揮者と共演している。

1994年から現在まで、カーネギーホールやサントリーホールでの演奏、100枚以上のクラシックCDの収録、音楽フェスティバルなどでの演奏活動とともに、プロデューサーとしても活躍している。

2003年から2006年まで、日本チェコ交流協会の会長と、Dartmore Institute for Central European Studiesの学長を務めた。現在もDartmore Instituteの役員を務めている。2005年には、Jiri RohanプロダクションでフジテレビとPCM、チェコ国立交響楽団、そして指揮者・西本智美とともに、日本国内でオーケストラツアーを行なった。2009年には、無印良品CD BGM15の制作を行ない、プラハ・スピリット・クインテットでは、制作及びプロデューサーとしてCDを発売した。

2011年1月から11月まで富士市に滞在。音楽活動をしなから、日本茶を学ぶ。8月28日には、ロゼシアターで東日本大震災復興を願って友人であるソプラノ歌手のシャーロット・ド・ロスチャイルドさんと指揮者の柳沢寿男さんを招き、チャリティーコンサートを行なった。「日本茶アドバイザー」として、日本茶をこよなく愛している。



Jiri Rohan (Česká Filharmonie Cb)

ジリ・ローハン 元チェコ・フィルハーモニー管弦楽団 コントラバス奏者

親しみやすい名曲や楽しい民謡を演奏させていただきます。～合唱団「わだち」



(上) 合唱団「わだち」第49回定期演奏会(2018年5月2日川口リリアホール)  
(右) プラハ混声合唱団訪日演奏会での合同演奏ステージ(2012年11月なかのZEROホール)。プラハ混声合唱団と合唱団「わだち」が合同でドヴォルザークの歌(チェコ語)と「ふるさと」(日本語)を歌い、会場の観客と共に感動を味わいました。

チェコスロヴァキア建国100周年に当たる今年、これを記念する音楽祭が日本アマチュア演奏家協会によって開催されるのは、とても意義深いことと存じます。そしてこの音楽祭に私たち、合唱団「わだち」も加えていただけましたことをとても嬉しく、光栄に思っております。と申しますのも、私たちは1973年にL.ヤナーチェクのカンタータ「アマルス」を初演して以来、チェコスロヴァキアの合唱曲にすっかり魅せられ、ほとんど毎年のように、これを演奏・紹介し続けてまいりましたので、そうした活動が評価されてのこととお聞きしているからであります。本日は私たちのレパートリーの中から、比較的親しみやすい名曲や楽しい民謡を演奏させていただきます。

合唱団「わだち」は1967年に指揮者の諸井昭二によって設立され、日本を含む世界の合唱曲に幅広く取り組んで来ましたが、中でも縁があって、チェコ、スロヴァキアの合唱曲の演奏に力を入れるようになり、これまで多数の合唱曲の本邦初演を行っております。1983年には初めてチェコへの招待演奏旅行が実現、これを機会にチェコの合唱団との交流が始まりました。その中でもプラハ混声合唱団とは現在も交流を続けております。2012年に諸井昭二の逝去により、指導体制は変わりましたが、これまでの路線を継承して活動を続けております。2019年9月22日(日)には浜離宮朝日ホールにて第50回定期演奏会を行なう予定です。ぜひ、聴きにいらしてください。





# Program

## 第1部

### エイパ代表のご挨拶

Greeting from APA (Amateur Music Players' Association, Japan)

### チェコ大使館のご挨拶

Greeting from the Embassy of the Czech Republic

### 民謡を中心としたチェコとスロヴァキアの歌 (原語による)

合唱団 "わだち" 指揮: 中村敏彦

Czech & Slovakian Folk Songs by Choir "Wadachi"

### 音楽談義 (日本語) & 演奏

Mr. Jiri Rohan 氏 (元チェコ・フィルハーモニー管弦楽団コントラバス奏者)

Talk & Double Bass Solo by Mr. Jiri Rohan

(休憩)

## 第2部

### フンメル: フルート、チェロ、ピアノのための三重奏曲 Op.78 J.N.Hummel: Flute Trio Op.78

Pf 関玲子、Fl 井口博史、Vc 佐原廣太郎

### フィビヒ: ピアノ四重奏曲 ホ短調 Op.11 Z.Fibich: Piano Quartet in E Minor, Op. 11

Pf 山田博子、Vn 小永井博子、Va 守屋朋子、Vc 宮本愛子

### スーク: ピアノ四重奏曲 第1番イ短調 Op.1 J.Suk: Piano Quartet in A Minor, Op.1

Pf 下地早苗、Vn 有馬善一、Va 原田久美子、Vc 村田幸平

### ドヴォルザーク: ピアノ三重奏曲 第4番「ドゥムキー」Op.90 A.Dvořák: Piano Trio No.4 Op.90 "Dumky"

Pf 丸山かおり、Vn 宮本武郎、Vc 宮本愛子

### マルティヌー: ピアノ五重奏曲 第1番 H.229 B.Martinu: Piano Quintett No.1 H.229

Pf 大橋朗子、Vn1 藤井壮一郎、Vn2 田中弘志、Va 永田文子、Vc 永田雅夫

(休憩)

## 第3部

### ヴラニツキー: フルート、オーボエと弦楽四重奏のための六重奏曲 第6番 P.Vranický: Sextet No.6

Vn 鈴木良子、Va1 新巳喜男、Va2 横倉絢、Vc 藤波忠、Fl 市川正子、Ob 重田淳二

### ノヴァーク: 弦楽四重奏曲 第2番 二長調 Op.35 N.Novák: String Quartet No.2 in D Major, Op.35

Vn1 吉田和道、Vn2 山下早代子、Va 園池由香子、Vc 松本伸雄

### カリヴォダ: 弦楽四重奏曲 第1番 ホ短調 Op.61 J.V.Kalivoda: String Quartet No.1 in E Minor, Op. 61

Vn1 平井真希子、Vn2 山田文代、Va 林英治、Vc 三木雅

### スメタナ: 弦楽四重奏曲 第1番 ホ短調「わが生涯より」 B.Smetana: String Quartet No.1 "From My Life"

Vn1 山下早代子、Vn2 徳永優子、Va 久保寺健子、Vc 臼田正子

### ヤナーチェク: 弦楽四重奏曲 第2番「内緒の手紙」 L.Janáček: String Quartet No.2 "Intimate Letters"

Vn1 荒井隆、Vn2 加藤美千子、Va 園池由香子、Vc 小野祐子

### カレル: ノネット (管弦九重奏曲) R.Karel: Nonet

Vn 西本徳子、Va 吉田和道、Vc 松本伸雄、Cb 建部欣司、Fl 馬淵普之、Cl 内海豊

Ob 馬場邦男、Fg 月川哲雄、Hr 山田淳市、Cd 高橋淳二

# Program Note

## 合唱団 "わだち"

### ♪ Mikulecká dědina (ミクレツの村)

モラヴィア・スロヴァーツコ地方の民謡。「まるで絵のように美しいミクレツの村、そこには私の恋人が住んでいる」

### ♪ Prší, prší (雨が降る、降る)

スロヴァキア民謡。「雨が降る、降る。ひたすら降る。私が彼女の家を出た時、ズザナの目は涙に濡れた。父母が反対しても私はこの娘を貰おう」

### ♪ Aká si mi krásna (ああ何と美しい)

スロヴァキア民謡。「おお、なんと美しい私の故郷よ。山々も空も美しい。私は感謝の涙でお前を祝福し、歓迎する」

### ♪ Slovácké verbunky (スロヴァーツコの徴兵の歌)

モラヴィア・スロヴァーツコ地方の民謡。「私は行く。村を通過して行く。村では音楽が奏でられ、私は徴兵検査を受ける。だが入隊はしない。恋人が嘆くだろうから」

### ♪ Bude večer (夕闇が迫り)

モラヴィア・スロヴァーツコ地方の民謡。「もうすぐ夕暮れになる。いとしい人よ、お前は山の向こう、森の向こう、どこにいるの?」

### ♪ Napadly písně v duši mou (歌が私の心に降りてきた)

ドヴォルザークの混声合唱曲集「自然の中にて」の一曲。チェコの美しい自然と人々の心を歌っている。当合唱団では国歌として長年歌っている。

### ♪ ヴルタヴァの流れ

スメタナの交響詩「わが祖国」の第2曲「モルダウ」(チェコ語でヴルタヴァ)に基づく合唱曲。作詞・野上彰、編曲・諸井昭二(当合唱団の創設者、初代指揮者)。

## フンメル: フルート、チェロ、ピアノのための三重奏曲 Op.78

ヨハン・ネポムク・フンメル (Johann Nepomuk Hummel)

は現在のスロヴァキアの首都ブラチスラヴァ生まれの作曲家兼ピアニストです。指揮者であり弦楽器奏者であった父ヨハネスから音楽の手ほどきを受け、ヨハネスのアン・デア・ウィーン劇場指揮者就任によりヨハン8歳の時にウィーンに移りました。モーツァルト、サリエリやハイドンにも師事し、ベートーヴェンとも親交を深めます。成人後は宮廷楽長を歴任する一方、芸術の街ヴァイマルの発展にも尽力しました。

Op.78の正式タイトルは「フルート、チェロ、ピアノのための美しいミンカの主題に依るアダージョ及び変奏曲とロンド」で、導入部とテーマの後7つの変奏曲で構成されています。ウクライナ民謡に由来するテーマはどこか東欧を感じさせ、短いながらも各変奏曲は大変バリエーションに富んでいます。「美しいミンカ」はドイツ、オーストリアでも流行り、ベートーヴェンやウェーバーによって同じテーマによる変奏曲が作られています。今回チェコスロヴァキア建国100周年記念演奏会にあたり、ウィーンやドイツでも大活躍したスロヴァキア出身のフンメルを演奏する機会をいただき、大変嬉しく思っております。(Pf 関玲子)



Hummel 1778-1837

## フィビヒ: ピアノ四重奏曲 ホ短調 Op.11

ズデニェク・フィビヒは、ドヴォルザークの9年後の1850年に、東ボヘミアで生まれました。母親がウィーン出身でライプツィヒなどで学んだこともあり、シューマンなどのドイツ音楽の重厚さと、スメタナなどのチェコの民族音楽を融合することに成功しました。23歳の時、ブラハに戻り作曲したのが、出世作となったこのピアノ四重奏曲作品11です。

第1楽章: アレグロ モデラート

リズムカルなモチーフと美しい旋律が絡み合うロマンチックな楽章。

第2楽章は、弦楽三重奏で始まる美しいテーマと8つの変奏曲。

第3楽章: アレグロ エネルジコ

情熱的なフレーズが展開していき、最後は華やかなコーダで終わります。(Pf 山田博子)



Fibich 1850-1900

## スーク: ピアノ四重奏曲 第1番イ短調 Op.1

私がスークという作曲家を知ったのは2001年に出た室内楽全集のCDだったと思います。他に気に入った曲もありましたが、ピアノ四重奏曲は一聴して心を捉えました。ただ、当時は楽譜を入手するには苦労しました。機会があって、今年7月の関西の例会で演奏するべく練習を始めていました。そこへ今回の音楽祭の告知をいただきました。

すべてチェコスロヴァキアの室内楽で構成されるコンサートという滅多にない

機会でしたので、共演者の皆さんの快諾を得て、関西から馳せ参じた次第です。これも何かの縁ではないかと感じています。自分の演奏もさることながら、みなさんの演奏を拝聴することも大きな楽しみです。企画された皆様にはその労に対して感謝申し上げます。

スークは、プラハ音楽院で作曲をドヴォルザークに学び、チェコ四重奏団を結成。後に母校で教鞭を執り、マルティヌーらを指導。この曲は、スーク17歳の作品。1. Allegro appassionato 2. Adagio 3. Allegro con fuoco の3楽章構成。

文字通り作曲家の原点となるような作品です。清新ではあるが、書法はすでに完成されています。全体に大変力強さをもった曲で、美しい旋律も随所に見られます(特に第2楽章のテーマは魅力的)。(Vn 有馬善一)

## ドヴォルザーク: ピアノ三重奏曲 第4番 ホ短調「ドゥムキー」Op.90 B.166

この曲はドヴォルザークの最盛期を代表する室内楽曲の名作です。1891年4月に、ドヴォルザークがプラハ大学から名誉博士号を授与されたことを記念する式典で、彼自身がピアノパートを受け持って初演されました。アメリカのナショナル音楽院院長に招聘されたドヴォルザークは、渡米に先だつ1892年1月から5月にかけて



# Program Note

てボヘミアやモラビアの町々でお別れコンサートツアーを開催し、この曲を自身で30回以上演奏しています。ふんだんに盛り込まれたチェコの民族性や親しみやすさゆえに好評を博しました。副題のドムキー Dumky はドムカ Dumka の複数形です。Dumka はもともとウクライナ民謡の哀歌で、当時支配的だったドイツの音楽形式に対してスラヴ民族音楽の独自性を探求していたドヴォルザークは、たびたび曲の一部にこれを取り入れてきました。



Dvořák 1841-1904

6つのDumkaだけで構成されるこの曲は斬新で、ゆったりとしたもの悲しい旋律と明るく陽気で踊るような旋律とが、テンポやリズムの急な変化を伴って交互に現れます。緩急、明暗を際立たせた美しい曲調の中に雄大な響きが織り込まれ、心をうちます。

今日は演奏時間の関係で第4楽章を割愛いたします。また最初の3楽章はattacaの指示があり、続けて演奏いたします。(Vn 宮本武郎)

## マルティヌー：ピアノ五重奏曲第1番 H.229

チェコを代表する作曲家の一人であるマルティヌーは、チェコで勉強した後1920年にパリへ留学、1941年にはナチスから逃れてアメリカへ渡り、当時の先端とされる「新古典スタイル」を土台としながらも、自国ボヘミア民謡やジャズ風要素など、様々な語法を用いる独創的な作法を追及した作曲家です。2曲あるうちの「ピアノ五重奏第1番」はこの手法を熱心に取入れた曲のひとつで、こつこつと煮詰めたような楽しさがあります。1920年代にパリで流行ったダンスやジャズなどフランスの影響も強く、それらを1930年代になって実現したものと思われま



Martinů 1890-1959

す。第1楽章 -Poco Allegro 5つの楽器により力強く幕をあけます。不協和音や3連符を駆使したテーマが次々と現れ、最後に冒頭のテーマが情熱的に再現されます。

第2楽章 -Andante (Poco moderato) 讃美歌のような、弦とピアノの対話が美しい。

第3楽章 -Allegretto 変拍子に満ちたリズムカルな間奏曲、またはスケルツォ。トリオはフォークソング風ながら、3拍子の中での2拍子や3拍子と2拍子のポリリズムを取り入れるなど、典型的なマルティヌーの手法を見せます。

第4楽章 -Allegro moderato 最終章らしいマーチ風のテーマで賑やかに始まります。中間部は民謡風のメロディを半音・復調で弦に、その下でピアノに変拍子を刻ませ、なんとも妖しい雰囲気醸し出し、マーチ風のテーマが再現され、輝かしいエンディングとなります。1911年に作曲された、ストラヴィンスキーの「ペトルーシカ」を思い浮かべてしまうのは気のせいでしょうか。(Pf 大橋朗子)

## ヴラニツキー：フルート、オーボエと弦楽四重奏のための六重奏曲第6番

ヴラニツキーはチェコ南部のモラヴィアで生まれ、ウィーンに出

て、同い年のモーツァルトなどと親しく交流しました。ヴァイオリン、オルガンが得意で、指揮者としての信頼も厚く、ベートーヴェンの第1交響曲、ハイドンのオラトリオ「四季」の初演を任せられました。また、彼のオペラ「オベロン(妖精の王)」は、モーツァルトが「魔笛」を産み出すヒントになりました。作品は多岐にわたりますが、特に交響曲に優れ、今日演奏する「フルート、オーボエと弦楽のための六重奏曲」も、交響曲を聴くような重厚さがあります。ヴィオラが2本という珍しい編成で、どっしりとした土台の上で華麗にヴァイオリンが舞い、2本の管楽器がそれに応えます。シンプルで深みのあるフレーズの繰り返しを、どう劇的に盛り上げ、また可憐に歌うか、6人で工夫を重ねました。この忘れられた作曲家を広く知ってほしいという願いから、生誕250年を機に、ネット上に「ヴラニツキー・プロジェクト」というサイトが作られました。英米スウェーデンなどの音楽家の運営する、ヴラニツキーへの愛に満ちた広場です。そこに行くと、いくつかのヴラニツキーの楽譜も無料で入手できます。あなたもヴラニツキーの曲を演奏してみませんか。(Fl 市川正子)



Vranický 1756-1808

## ノヴァーク：弦楽四重奏曲第2番 二長調 Op.35

ヴィツェスラフ・ノヴァークは明治3年生まれの子のチェコの作曲家・教育者で、プラハ音楽院でドヴォルザーク最後の弟子として作曲を学び、ドヴォルザークとスメタナに続く世代におけるチェコ音楽ナショナリズムの支持者の1人と考えられています。同時代のワーグナーやブラームスの美学を超えるものを追求し、音楽院卒業後訪れたモラビア東部とスロバキアの民謡がインスピレーションの源泉となりました。



Novák 1870-1949

この弦楽四重奏曲第2番はルーマニアのワラキアの森に長期滞在した直後、34歳の時に作曲され、プラハチェコ室内楽コンクールで最高賞を獲得しました。作曲された20世紀初頭としては斬新な2楽章形式ですが、第2楽章は実質3つの楽章から構成されています。第1楽章は作曲家自身が「フーガ」と名づけ、息の長いフーガとなっています。第2楽章「ファンタジア」の冒頭メロディはワラキア地方の民族音楽から取られています。曲の最後には第1楽章のフーガが短縮された形で現れ、神々しく曲を閉じます。(Vc 松本伸雄)

## カリヴォダ：弦楽四重奏曲第1番 小短調 Op.61

カリヴォダはシューベルトよりも4歳年下で、チェコのプラハ生まれ、ロマン派の作曲家です。プラハ音楽院でヴァイオリンと作曲を学んだ後、ドイツの地方都市の宮廷楽長として迎えられ、43年間もの長い間、その職に留まりました。従って大都市の一般聴衆にはほとんど縁がなく、死後忘れ去られる運命にありましたが、近年ようやく再評価される気運にあります。この曲は1835年に出版された中期の作品でプラハの旧友に献呈されています。

第1楽章 アレグロ・モデラート：冒頭のユニゾンの主題が内に秘めた情熱を込めて第1ヴァイオリンに受け継がれます。第2楽章 アダージョ：牧歌的な静けさから次第に浪漫的な感情の高まりを歌いあげます。スキップするようなリズムが特徴的です。第3楽章 スケルツォ：珍しく全員のピツィカートで終始します。トリオは第1ヴァイオリンが野良仕事風の歌を歌います。第4楽章 ヴィヴァーチェ：ボヘミアの収穫祭を祝うような踊りのリズムが楽しい曲です。ドヴォルザークの祖父くらいの年代を思わせるチェコ音楽の源流が感じられます。(Vc 三木雅)



Kalivoda 1801-1866

## スメタナ：弦楽四重奏曲第1番 小短調「わが生涯より」

スメタナ自身が、「自分の生涯を音の絵画として描くこと」と述べこの副題をつけた通り、この曲はスメタナのそれまでの葛藤や苦悩、交差する喜びと悲しみを表現した曲となっています。



Smetana 1824-1884

この曲が作曲された1876年(52歳)の2年前にはすでに失聴しており、初演された1879年には自身その演奏を聴くことはできなかったと言われています。ちなみに初演の3日前に行なわれた試演ではヴィオラの名手だった作曲家ドヴォルザークがヴィオラを担当し、この曲を絶賛しました。

第1楽章ではオペラの幕開けのような重音のあと、ヴィオラが通常の弦楽四重奏ではありえない最高音域部でテーマを奏でます。チェコの国民的な音楽を確立しようとしていたスメタナですが、そのころのチェコはオーストリア・ハンガリー帝国のもと、支配階級のドイツ人とドイツ音楽に支配されており、チェコの民族的音楽は軽んじられていました。ドイツ派からは民族的旋律を取り上げることを蔑視され、逆に民族派からはワーグナー的なストーリーのある劇場スタイルを批判され、その中で彼自身大きな葛藤がありました。その孤立した、「出る杭」のような自分を表したのが、このヴィオラの旋律だろうと想像されます。

第2楽章は熱狂的ダンス愛好家であった青年時代の楽しい日々を思い出し、楽しく踊る様子が描かれ、民族色の濃い楽章です。

第3楽章は初恋の甘い思い出が描き出されます。楽章の中間部で厳かに奏でられる重音の数小節は、教会での厳粛な結婚式を表し、そのあとに続く2台のヴァイオリンの細かい半音の動きは新婚の秘めた幸せを描いていると思われる。最初の妻 Katerina との間に5人の子を設けましたが、最大の悲しみは彼女が32歳の若さでこの世を去ったことでしょう。

第4楽章は民族的なメロディやリズムで国民派としての音楽を確立しています。クライマックスは終盤にヴァイオリン1によって奏でられる、高い「E」(ミ)の音(フラジオレット)が、スメタナが苦しんだ幻聴を表しています。短調の哀しいメロディが最後に長調に変わり、やすらかに曲が終わるのは、スメタナの安息を示しているようです。

なお、私たちはこの夏チェコの La Pellegrina 音楽コースに参加し、この曲を Bennewitz Quartet の Štěpán Ježek 氏より、指導を受けました。本解説の一部は氏の解釈によります。(Vn 山下早代子)

## ヤナーチェク：弦楽四重奏曲第2番「内緒の手紙」

チェコのモラヴィア地方に生を受けたレオシュ・ヤナーチェクは、モラヴィア民謡を題材とした音楽作り、チェコ語の抑揚と旋律とを融合する「発話旋律」などの試みで知られた作曲家です。本日演奏する弦楽四重奏曲第2番は最晩年の1928年に作曲されましたが、枯れた音楽ではまったくなく、38歳年下の人妻カミラ・ストロヴァーへの恋愛感情がてんこ盛りの、極めて熱い濃密な音楽です。副題の「内緒の手紙」は、彼が彼女に送った700通もの手紙のことを指しており、曲中のヴィオラはカミラを象徴しているとのこと。作曲当時は、普通のヴィオラではなくヴィオラ・ダモーレの使用が想定されていたとの逸話からも、作曲者の思い入れが感じられます。作曲技法としては「コラーージュ書法」が使われているのが特徴的です。2楽章に顕著ですが、冒頭に現れたメロディが速度や調性や楽器の組み合わせを変えて、次から次へと切り替わることにより、恋愛感情の高揚が見事に表現されています。さて高いテクニクの壁を越えてこのヤナーチェクのパッションにどこまで迫れるか、アマチュアの大チャレンジに本日はお付き合いください。(Va 園池由香子)



Janáček 1854-1928

## カレル：ノネット(管弦九重奏曲)

何ともすさまじい曲です。ドイツ・ナチへのレジスタンスの容疑で投獄された作者が、チェコ北部のテレジーン(ドイツ名:テレージエンシュタット)にある収容所で、独房内のトイレトペーパー(※)に木片で書いた曲がこのノネット(9重奏)です。その後作者はチフスを発症し、1945年3月解放を待たずして獄中で死亡します。このテレジーン(ドイツ名:テレージエンシュタット)の収容所には、一時期ドイツの心理学者フランクルが収容されており、その著書「夜と霧」では死に直面した収容者たちの極限の心理状態が想起されます。作曲家ルドルフ・カレルは、このノネット(9重奏)の曲に、獄中(ゲッター)での思い・希望を託すのです。

第1楽章(アレグロ〜メノモッソ)：冒頭のテーマは、収監され自由を奪われた衝撃を、そしてゆっくり(メノモッソ)なテーマでは嘆き・諦念を表していると思えます。

第2楽章(アンダンテ)：クラリネットから始まる繰り返しの切ないメロディが、望郷の思いを感じさせます。

第3楽章(モルトアレグロ)：作曲者が夢想する、解放される時への息づかいが伝わってきます。(Hr 山田淳市)

(※) このトイレトペーパーは、ホール外の展示コーナーで、その写真を見ることができます。



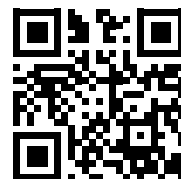
## 日本アマチュア演奏家協会（エイパ）について

通りがかりの家から聴こえる楽器の音。「見知らぬ人と合奏ができれば、どんなに楽しいだろうか。そんな連絡網はできないものだろうか」合奏相手でもあった最愛の娘を失った父親の素朴な願いが実を結び、1974年6月に日本アマチュア演奏家協会は発足しました。

皆様に支えられて、エイパは来年で設立45周年を迎えます。今までに全国で4,100名以上の方々が会員登録をされましたが、現在は、首都圏で640名、関西で240名、その他全国で140名、合計1,020名ほどの方々が活躍中です。2008年7月にはNPO法人としての登録も行ないました。

現在のエイパの主な活動は、首都圏、名古屋地区、関西地区で、主に月に1回集まって室内楽を楽しむ様々な例会活動や、年に一度の年次大会でコンサートやプロ演奏家との合奏、公開レッスンなど盛りだくさんの活動を展開しています。さらに、2016年より、レクチャーコンサートシリーズを開始し、6回を数えています。

皆さんも、室内楽を楽しんでみようと思われましたら、ぜひエイパのホームページをご覧ください。QRコードをスマートフォンで撮影していただくことで、ご覧いただけます。例えば、首都圏なら24もの様々な特色ある例会が、あなたをお待ちしております。毎回違うメンバーといろいろな曲を演奏するのを楽しむ会や、固定メンバーで半年間じっくりと一つの曲に取り組み、コンサートで発表する会など、きっとあなたの希望に合ったスタイルの例会が見つかるはず。楽器は、弦楽器でも管楽器でもピアノでも、そして歌の皆さんも大歓迎。室内楽に興味はあるけれど、まだ自信がない、という方でも、安心してご参加いただけます。



エイパ事務局 [info@apa-music.org](mailto:info@apa-music.org)

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町 2-6-16-201

2019年3月30日(土)に、この宮地楽器小ホールにて海外から10数人のアマチュア演奏家を招いて、「第4回国際室内楽音楽祭」(APA主催)を開催します。こちらにも、ぜひ足をお運びください。

